備後国分寺跡

本格的な地方官寺

奈良時代の741（天平13）年、聖武天皇は仏教によって国民の心をまとめようと考え、国ごとに国分寺・国分尼寺を建てさせました。備後国の国分寺跡は神辺町下御領にある現在の国分寺の南で確認されており、国分尼寺は西中条の小山池廃寺跡にあったと考えられています。

参道入口

1972（昭和47）年から4年間にわたって行われた発掘調査によると、約180m四方の土塀で囲まれ、西に金堂（本尊を安置する建物）、東に七重の塔が並び、その北側に講堂（僧が説教をする建物）、南側の古代山陽道に面して南門があったと考えられています。

白い土塀で囲まれた中には朱で塗られた柱と瓦葺の建物が立ち並び、特に天高くそびえる塔の姿には、茅葺の建物を見なれていた当時の人々にとって大きな驚きであったことでしょう。

しかし、この備後国分寺も戦国時代の神辺城をめぐる戦火で焼け落ちてしまい、1562（永禄5）年の再建後も1673（延宝元）年の堂々川の氾濫で押し流されるという不幸にあっています。

現在の国分寺

このような歴史を経て、現在の国分寺本堂は、1694（元禄7）年に福山城主・水野勝種によって再建されたものと伝えられています。

（2008年3月号に掲載）

備後絣と富田久三郎

伊予絣・久留米絣と並ぶ三大絣

絣は経糸、緯糸の染め残した部分を組み合わせて模様を作り出します。1853（嘉永6）年、芦品郡有磨村（現芦田町）の富田久三郎によってこの技術が創案されました。

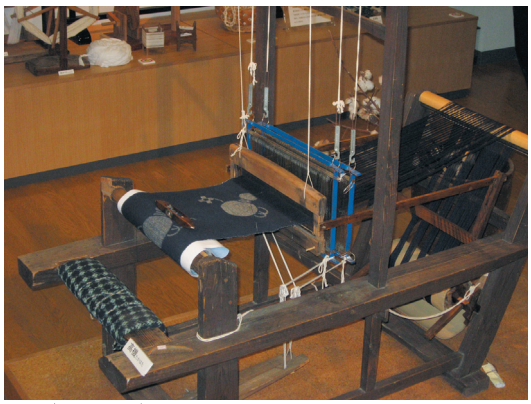
久三郎16歳のころ、絹織物の技法を木綿織物に応用することに着想し、幾度も試作に励み、ようやく一反の絣を織り上げたといわれています。

久三郎が旧芦品郡一帯（府中・芦田・新市・駅家）の近郷農家にこの技術を伝えたことで、盛んに絣の生産が行われるようになり、明治初期には大阪の商店に200反を出荷しました。この時の商品から「備後絣」と名付けられました。

富田久三郎

備後絣の生産は、1935（昭和10）年には、足踏み織機から力織機へ転換するなど、早くから機械化・分業化が進み、大量に生産されるようになっていきます。1960（昭和35）年には、330万反を出荷し、全国生産高の70％を占めるまでに成長しています。「ガチャガチャ」と緯糸を通すシャトルの音から「ガチャマン」（ガチャという音で万の金が儲かる）という言葉を生み、当時の勢いを物語っています。

この地域の主要産業のひとつである繊維産業の礎を築いた久三郎の功績をたたえ、地元絣生産者により多くの石碑などが残されています。素盞嗚神社境内には「富田翁碑」が、大佐山運動公園を眺める位置には久三郎の胸像が設置されています。


高機（たかはた）

絣製品の様相は時代とともに変化してきても、久三郎の地方産業の振興にかけた熱意は、現在に受け継がれ、藍の香りや木綿の温もり、素朴な模様の備後絣は多くの人々に親しまれています。

（2008年9月号に掲載）

山野大原の古墓群

地頭の躍進

県道加茂油木線の七曲トンネルを抜けて山野町の中心部に入り、小田川が大きく湾曲する辺りに中世の山城である戸屋ケ丸城跡があります。

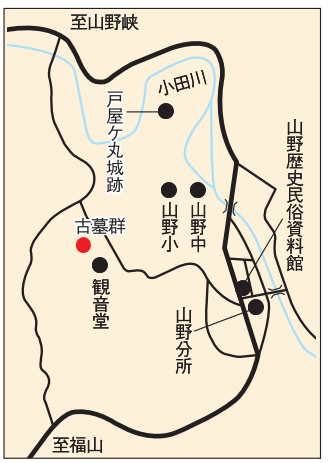
城主は佐々木重綱と伝えられ、鎌倉時代の初めに関東から地頭職としてこの地に入り、大原氏を名乗って山麓の大原の地域を開墾して居住しました。南北朝時代に大原氏は南朝方の江草氏によって攻撃されると、宮氏が地頭職となり、江草氏がその城代を勤めます。

宝篋印塔と五輪塔

この大原集落には城主の菩提寺とされる正光院跡があり、寺跡に残る観音堂境内には70数基の宝篋印塔と五輪塔が整然と並んで祀られています。これらの墓は花崗岩製か石灰岩製で、形態から鎌倉時代末ごろから室町時代の古墓群と考えられます。この中に塔身の部分に「白璧」の文字を刻んだ宝篋印塔があります。

観音堂

江戸時代の『備陽六郡志』には「(新市町)下安井村の安養寺跡には、亀寿山城主であった宮氏累代の石塔群があり、安養院白璧昌純居士という石塔文字(戒名)がかすかに見えていたが、今では荒れ果て所在は不明である」という内容の記述があります。宮氏の菩提寺であった安養寺に「白璧」の文字が刻まれた石塔があったようです。



天文年間(1532~1555)、亀寿山城・志川滝山城(加茂町)などは安芸の毛利氏に攻撃されて宮氏は滅亡します。この古墓群の主を断定することはできませんが、あるいは、宮氏の滅亡後、その縁者が供養のために安養寺からこの地に移したのかもしれません。

(2009年2月号に掲載)

中山績園頌徳碑

郷土の漢学者

駅家小学校西側を南北に通る市道沿いに中山績園の「頌徳碑」があります。績園は、1850（嘉永3）年、倉光村の庄屋の家に生まれました。幼名は忠三郎といい、政陽と名乗り号を績園といいました。

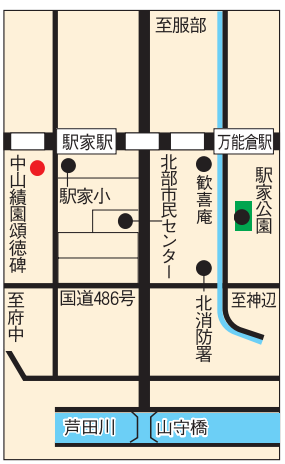
1864（元治元）年、弱冠15歳にして、備中西江原（現井原市）にあった一橋家の郷塾興譲館（現興譲館高校）に入り、館長の阪谷朗廬から漢学を学びました。塾では都講（塾頭）を務めるほど勉学に励みました。興譲館卒業後は、儒者・書家であった藤沢南岳や、東京の依田学海などの高名な学者たちと漢学・漢詩・書などを講究しました。

頌徳碑

帰郷した績園は、「優則学舎」と名付けた私塾を倉光村に設けて子弟の教育にあたります。績園33歳の時です。また、西本願寺が真宗教義を修める者を養成する目的で新市に設立した「博錬教黌」でも教鞭を執っています。博錬教黌は、新市の鋳物屋だった高田嘉助が巨額の資金を出資し、約21年間存続した学校です。その間に400人に及ぶ卒業生を出し、僧侶以外にも多くの人材を輩出しました。現在、その建物は駅家公園の近くの「歓喜庵」に移築されています。

績園は、福山藩の絵師として著名な藤井松林の娘阿松と結婚しています。彼女は、松濤と号した女流画家で知られています。美人画を得意とし、京都で開催された第4回内国勧業博覧会に、「美人手球遊絵図」などを出品し高い評価を得ています。

中山績園の墓



1910（明治43）年、績園は61歳の生涯を終えますが、彼の徳を後世に残すため、地元の弟子であった卜部陸太・安村伝六たちが中心になって頌徳碑の建立と『績園遺稿』を出版しました。

（2009年3月号に掲載）

御領山の大岩

鬼伝説の山

神辺町の御領から中条にかけての山々は花こう岩質の地質で、山上には多くの巨岩が露頭しています。中でも、上御領の御領山には多くの巨岩・奇岩が露頭しており、その形の不思議さから地元には次のような伝説が伝えられています。

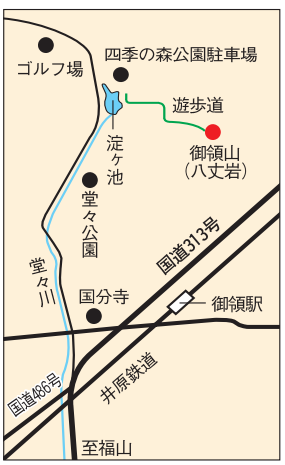
「その昔、御領山の山頂には栗の木が多く茂り、向かいの権現山は岩山であった。二つの山には鬼が住んでいたが、ある時、山の高さのことでけんかをして、御領山の鬼は栗を、権現山の鬼は岩を投げ合ったので、御領山は巨岩・奇岩が露頭するようになり、権現山は石がまったくない栗山となった。今でも、岩の高さだけ御領山の方が高くなっている。」

伝説の山、御領山は神辺町の北東部にあり、登山道を登りきると多くの岩が一堂に会したように起立している姿は、見る人を圧倒します。

上の面が八畳敷の広さがあるということから名付けられた八丈岩の上にはしごを伝って登ると、権現山の鬼が岩を投げつける際に踏ん張ったためにできたと伝えられる鬼の足跡が残っています。

御領山山頂の八丈岩

登山道入り口



このほか、大蛇が棲(す)むというくぐり岩、岩穴の中に人が千人も入れるという千人かくれ岩、石でたたくと金属性の音を発する鳴岩などがあり、はるか昔の伝説の世界へ私たちを誘ってくれます。

これから新緑が鮮やかな季節となります。ハイキングをかねて伝説の山を散策してみませんか。

（2009年5月号に掲載）

紫陽花ロードを歩く

九十九折りの散策路

国道313号を岡山方面に進み、広島県立神辺高等学校の前まで来ると「吉野山公園」の案内標識が見えてきます。

神辺城跡のある黄葉山（こうようさん）の東北麓一帯は、昔から「備後吉野山」と呼ばれ、桜の名所として知られていました。春になると山の傾斜地一帯には数千本の山桜が咲き誇り、下の広場では草競馬も行われ、多くの人たちの憩いの場所として賑（にぎ）わっていました。

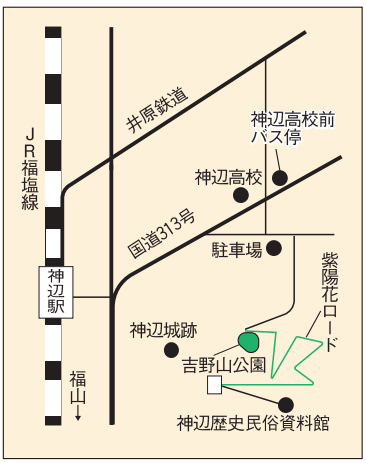
遊歩道沿いに咲くアジサイ

ところが、戦争中になるとこれらの桜は伐採されてしまい、その面影も薄れてしまいますが、戦後地元の人たちによりソメイヨシノが植えられ、備後吉野山に名所が復活します。

現在は公園として整備され、まるで山腹を縫うように幾重にも折れ曲がった九十九（つづら）折りの道筋には、桜の時期が過ぎた初夏から梅雨にかけて、紫陽花（あじさい）が訪れる人の目を楽しませてくれます。

桜と神辺歴史民俗資料館

紫陽花は咲いているうちに色が次第に変化して行くことから「七変化」ともいわれ、「がく」が発達した不実の花（装飾花）を多数つけるユキノシタ科の落葉低木です。



吉野山公園の紫陽花は1975年ごろに、篤志家によって植えられたことを始めとします。その後、地元町内会の人たちを中心として植栽され続けてきました。今では、神辺歴史民俗資料館までの500mほどの道筋に約700本の紫陽花が育つようになり、誰いうともなく「紫陽花ロード」と名付けられました。

これから梅雨の時期になりますが、しとしとと雨が降る紫陽花ロードを散策して、色の七変化を楽しんでみてください。

（2009年6月号に掲載）

近在の寺院に釣り鐘を

高田嘉助の功績

高田嘉助は、1814（文化11）年に現在の駅家町服部で生まれています。商業を営み、のちに鋳造の技術を習得し、生涯の職として新市町で起業します。

1851（嘉永4）年には福山藩の大砲の鋳造を行うなど、その技術は卓越したものでした。その後も家業としての鋳造業に励み、釣り鐘をはじめ多くの鋳物製品を作っています。また嘉助は、鋳造によって得た財を社会に還元することにも心を砕き、1880（明治13）年には、現在の福山市新市町大佐山のふもとに博練教黌を創設し、地域の中等教育の礎を作っています。

本泉寺釣鐘

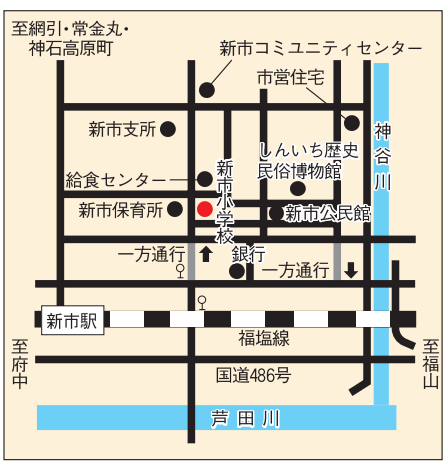
二代目・三代目ともに嘉助の名を襲名し、鋳造業に励み、安価・堅固・高性能な製塩釜を作って特許を取り、その販路は大きく広がり、製造品目も100種を超えました。

現在、近在の寺院や神社には高田鋳造所の名が刻まれた釣り鐘や手水などの鋳造品が多く残っています。これは、戦時中に、金属類の供出で失われたものを戦後新たに製造したものです。その数から、鋳物屋高田嘉助がこの地域に根を下ろし、地域の需要を支えてきたことをうかがわせています。

頌徳碑

写真の頌徳碑は、二代目嘉助が私財を投じて若い人材の育成に努めた功労を弟子たちが顕彰したもので、1923（大正12）年に現新市小学校内に建立されました。

三代目嘉助は、井伏鱒二との交友が深く、井伏の小説「鐘供養の日」などの作品に登場しています。



（2009年8月号に掲載）

至孝堂と網引公金村

父母への孝養

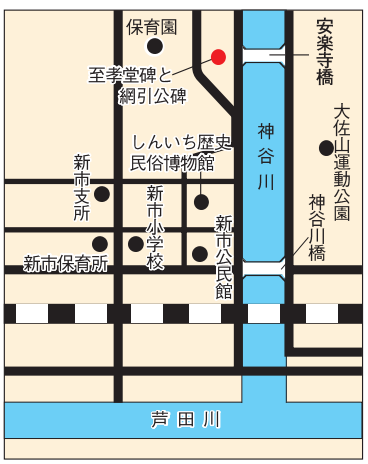
新市町にある神谷川橋の西土手を1kmほど上流にのぼると、大きなイチョウの木が見える一角に至孝堂碑と網引公碑があります。

至孝堂は、1837（天保8）年宮内村の庄屋林吉助が、奈良時代の歴史書「続日本紀」の一文に見られる網引公金村の孝行心に対し深く感銘し、その地に建てた私塾です。福山藩の儒者衣川閑齋をたびたび招き、広く庶民に孝養の道を説きました。

網引公碑

「続日本紀」には「神護景雲二（768）年二月壬辰、備後国葦田郡の人網引公金村、年八歳にして父を喪ひ、哀毀して骨立す。尋ぎて母艱に丁りて、追遠すること益深し、爵二級を賜ふ。その田租を復すこと終身」との一文があり、網引公金村について「父は病に伏せ、母の苦労も深く、子の金村は幼少の時から家事をよく手伝い、その孝行ぶりにより爵二級を与えられ、田租を免除された」と伝えています。また1889（明治22）年の町村制施行による合併では、地名の文字を組み合わせて新しい地名を付けることが一般的でしたが、宮内村・上安井村・下安井村の合併では、この地域に伝わる網引公の孝行伝説にちなみ「網引村」と名付けられました。

至孝堂碑



今からおよそ1，200年前の網引公の記録が、江戸・明治時代と語り継がれていることがうかがわれます。網引公は、今でも地域の多くの人々に愛され、遺徳を偲び続けられています。

（2010年1月号に掲載）

万能倉の廻国塔

石碑の伝えるもの

かつての石州銀山道である駅家町万能倉の県道下御領―新市線脇に高さが3m近くもある石碑が建っています。

石碑の右面には「于時　文化七（1810）庚午年　冬十一月之穀　本願主　当所　定円」とあり、今から200年前に六十六部と呼ばれた行者が残したものです。

六十六部を辞書で調べると「書写した法華経を全国六十六カ所の霊場に一部ずつ納める目的で、諸国の社寺を遍歴する行脚僧」とあります。

正面には阿弥陀三尊を表す種字（梵字）と天下泰平・国土安穏・日月清明・万民豊楽と日々の平穏を祈る言葉とともに、奉納大乗妙典日本廻国供養塔と刻まれています。大乗妙典とは法華経のことで、日本廻国とはまさに日本中を行脚することを表しています。

左面には戒名と「享和三（1803）亥年　五月初四日　俗名セキ行年二十五歳　遠州於袋井之駅而葬」とあります。遠州袋井は現在の静岡県袋井市で、この地から旅に出たセキが25歳の若さで客死し、はるか500km以上離れた土地で葬られ、その7年後に供養したものと思われます。

また、台石には十方助力・万人施主と世話人の名も刻まれ、多くの人の力によって建立されたことが分かります。

福山市には、70基以上の廻国塔が確認されており、遠くは現在の東京都や山形県、宮城県などの人が残したものもあります。日本中を自分の足で歩いた壮大な巡礼の証です。

路傍の石碑はいにしえの人々の思いと歴史を伝えてくれます。

（2010年2月号に掲載）

廻国塔正面

廻国塔を見る子ども

明治のコレラ流行

鎮魂のお地蔵さんと供養碑

コレラは、1883（明治16）年にコッホによって発見された細菌による伝染病です。当時は治療法も分からず、下痢や嘔吐の症状を伴い数日にして死に至る病気であったため人々から大変恐れられました。

日本でのコレラ流行の最初の記録は、1822（文政5）年までさかのぼり、西日本一帯に流行しました。1858（安政5）年には、最初の流行を上回る勢いで全国に波及し、数十万人もの死者が出ました。

中条八幡神社前の霊應碑

コレラは明治時代に入り、再び流行します。1877（明治10）年、長崎と横浜港に入った外国商船がコレラ菌をもたらし、全国で8，000人の死者を出す事態となり、2年後には、別府温泉から全国に蔓延、福山地方でも、その年の3月14日に、四国の松山市から伝染し、流行しました。全国で16万人の人がかかり、そのうち約11万人が死亡するというありさまでした。

広島県から出された通達は、下水・芥溜・雪隠および糞尿運搬の禁止、伝染しやすい食品を食べることの禁止、罹患者および家族・同居人の外出禁止、病死者の輸送方法や火葬の方法などが、矢継ぎ早に出されています。

コレラ地蔵

服部永谷の琴森山中にはこの時の死者を供養した「コレラ地蔵」と呼ばれるお地蔵さんが祀られています。1882（明治15）年1月に駅家町近在の15人が発起人となって建設したものです。また、神辺町の中条八幡神社鳥居脇には、「霊應碑」と題した同様な鎮魂碑が建てられています。

（2010年3月号に掲載）

亀山第一号古墳

武人の墓の登場

弥生時代前期の環濠集落で知られる亀山遺跡のある丘陵は、古墳時代以降になると祭祀の場所となり、亀山古墳群や平安時代創建と伝えられる岡山神社が造られるようになります。

丘陵北端にある亀山第一号古墳は、直径約28m、高さ2.3mの円墳です。遺体が収められた棺は長さ3.6m、直径50cmほどの丸太を真ん中から割った後に、中をくり抜いて作られた割竹形木棺と呼ばれるものです。棺のまわりは粘土で覆われ、雨水などが入らないように丁寧に造られていました。

木棺の中には、短甲（ヨロイ）・刀・剣・ヤジリなどの武具や武器、砥石・小刀・鎌・カンナ・ノミ・オノなどの工具、首飾りにした700点以上の玉類やくしなどの装飾品、棺の上には、ヤリ・盾・矛などの武器・武具や儀式に使う筒形銅器が供えられていました。

この古墳は、出土品から5世紀前半ごろに造られたものと考えられ、その規模や出土品の質・量が他の古墳より数段も抜きん出ていることから、この時代の神辺平野を統率していた武人の性格を持つ支配者の墓と思われます。

また、この丘陵一帯は亀山公園として地元の人たちによって整備され、桜の咲く季節には多くの人でにぎわいます。

墳丘に立つ案内板

短甲

（2010年4月号に掲載）